

作家と家族

- 三島文学の根底にあるもの -

許 昊*

ososeyo@hanmail.net

Contents

1. 家族を語る
2. 永井家と平岡家
3. 祖母の影響
4. 鎗木夫人
5. 男だけの家庭
6. 鬼子母神

Abstract

Yukio Mishima(1925-1970. Real name is Kimitake Hiraoka.) talked about himself all the time from he set out by professional writer, and most important materials of his works are himself and his family. Therefore we need to know well about Mishima's life and his family relation to understand his works. It is well-known that Mishima is born by immature baby and grew up overprotected by his grandmother. Mishima, the eldest grandson by the eldest son, caused trouble between grandmother and mother. Mishima had a sense of superiority because his grandmother came from a distinguished family, but suffered from an inferiority complex about grandfather who is a commoner by birth. Azusa Hiraoka, Mishima's father had a aspiration to make his son a high-ranking government official. On the other hand Mishima had a strong attachment heart about mother, and extraordinary affection about younger sister which passed over brother and sister relation. Therefore, in this treatise, I investigated some parts about grandmother in priority first as part of research about Mishima's family.

Key Words : Family, Grandfather, Grandmother, Father, Kishimojin

* 水原大学校 人文大学 日本語学科 副教授.

1. 家族を語る

三島由紀夫の作家歴はかなり早い時期から始まる。文壇デビュー前の習作期というのは十三歳頃からで、その当時既に完成度の高い作品を数多く残しており、川端康成の推輓で短編「煙草」をもって正式に文壇にデビューしたのは二十一歳の時であった。いわば学習院時代は習作期、大学時代は初期と言えるが、当時の三島としては、旺盛な創作欲に比べて、それ相応の原体験は非常に乏しい状態であった。そのせいか、三島の描く登場人物たちは殆んど作家の家族をモデルにしており、その人物たちが織り成す物語は近親相姦的な雰囲気漂わす場合が多い。それに三島自身、個人的なことがらを語るのが好きな作家であった。創作を通じてばかりでなく、「十八歳と三十四歳の肖像画」「小説家の休暇」「裸体と衣装」「太陽と鉄」などのエッセイや評論の中にも三島が自分のことを語った個所は数多く見られる。多分、出世作『仮面の告白』が自伝性の強い告白小説であっただけに、その影響が後々まで尾を引いているものと思われるが、人並み外れた強い自己顕示欲も手伝って、多少は飾られた自分を世間の人々に見てもらいたかったのであろう。当然ながら三島は自分を語るついでに、少なからず家族のことも、纏まった形ではないにしても、口外にしている。

ここで言う三島の家族とは、三島が生まれた時から幼少年期を一つ屋根の下で暮らした、祖父母・両親・妹・弟を言うが、三島の作品の多くが近親相姦的な男女関係を取り扱っており、その作品の中にこれらの家族のイメージが揺曳するのはそのせいである。家族の中で男性よりも女性、すなわち祖母と母と妹をモデルにしたヒロインがより頻繁に登場する。それに比べると、男性である祖父・父・弟について三島は殆んど語ったことがなく、従って作品の中でもその影は比較的薄い。その理由は多分、祖母が名門の武家出身であるのに、祖父の家系は平民だからであろう。

本稿では「三島文学における家族像」という大きな研究テーマの一環として、まずは、三島が幼少期にその過保護を受けながら一つ部屋で一緒に過ごした祖母

1) 三島の出生を前後した家庭内の事情については安藤武著『三島由紀夫の生涯』(夏目書房、1998)第一章中の「誕生の悲劇」を参照 pp.7~11

という存在の意味、そして三島の作品の中に見られる祖母のイメージについて考察してみることにする。

2. 永井家と平岡家

三島は、名門の家柄である祖母方の家系と、平民の家柄である祖父方の家系に対して、相反する(anbivalent)感情を抱いていた。それは三島の作品において優越感と劣等感という極端な形で現れている。三島の祖母夏は明治九年(1876)六月東京生まれで、永井玄蕃頭尚志の孫娘にあたり、大審院部長判事を勤めた岩之丞の長女である。十一人兄弟(男六人女六人、うち男子一人は夭折)で、男子五人が皆東大出身であり、女子六人も揃って東大出身者と結婚した。さらに永井家の祖先を遡ると、家康の臣下として頭角をあらわし、名将として知られた永井直勝に至る。夏の母方もまた名門で、外祖父は宍戸藩主松平頼位である。²⁾

このような名門の血を引く夏が平民出身の平岡定太郎と結婚したのは明治二十六(1893)年一月で、相手が東大出身とはいえ、まだ身分による差別意識が残っていた時節であるから、二人の結婚について世間では様々な憶測が飛び交った。佐伯彰一は「これほどの名門の長女を当時全く無名の平岡家に嫁がせるについては、夏子自身に何らかの問題がひそんでいたのではないかという大方の推測は避け難い³⁾」と言いながら、ジョン・ネーサンの説について触れている。そのネーサンの説は次のようなものである。

夏は有名な武家の娘で、彼女の外祖父は徳川家とも縁を持つ大名である。武家の血を引く若い娘が農民の息子と結婚するのは常識的には考えられないことであるが、この場合は二つの理由があったものと思われる。一つは、相手が帝国大学出身だったことであり、もう一つは、彼女に「病氣」があったことである。夏は子供のときからヒステリー性の発作を起こす癖があった。両親は苦心の末、十歳を越えたばかりの彼女を、明治天皇の近親である名門家族の有栖川家に預けることにした。環

2)平岡家の家系については『三島由紀夫事典』(勉誠出版、2000)中の「平岡家系図」参照。

3)佐伯彰一『評伝三島由紀夫』(新潮社、1978)、p.142

境の変化が彼女の病気を直してくれることを期待したのである。十五歳まで有栖川家に預けられていたが、彼女の病気は一向に好転しなかった。以後、十二人兄弟の長女である彼女は一家の大きな悩みの種になった。彼女が結婚しない限り、他の兄弟が先に結婚することは許されないのである。家族は彼女を結婚させるため手を焼いた。

父親によって決められたこの結婚が彼女の自尊心を傷つけたかどうか確かではないが、このような結婚自体が公私両方において彼女を侮辱的な目に合わせただろうことは想像に難くない。そうして彼女は、自らを憐れむと同時に夫定太郎を憎むようになった。⁴⁾

要するに、夏が平岡家に嫁いだのは「ヒステリー性の発作」があるためにやむを得ないことであった、というのがジョン・ネーサンの推論である。三島の祖母夏が激しい気性の持ち主であるのはよく知られているが、それが《病気》と呼ばれるほどのものであったかどうか、それは勿論ネーサンの推測で、根拠らしきものは何一つ提示されていないが、かなり興味深い説である。夏が有栖川家に預けられたことについて佐伯彰一は次のように分析している。

こうして、十代始めにいち早く、かなり環境を異にする他者の中にさらされたという体験は、若い夏子の人間形成にいかなる影響をもたらしただろうか。じつの所、推測してみる他ない事態なのだが、永井玄蕃頭の孫娘としての、武家風な育ちと躰けの上に、有栖川家の純公家風な躰けのいわば接ぎ木は、十代半ばの少女にとっては、相当な心理的負担となったに違いない。そこで、彼女のヒステリー症状は礼儀正しく作法のうるさい他家の雰囲気の中なかで、そとへの出口は一応ふさがれたにしても、一層こじれて、悪化する他なかっただろう。彼女のヒステリーの生理的、心理的な由來、因縁については、現在から確かめ直す手段もない訳だが、その過敏な感受性と、頑なまでの自我固執とは、十代半ばの頃に、動かしがたい素質の如きものとなり終ったと見ていいだろう。ただその中で、彼女の自我を支える根拠は、武士の基準と公家的な基準の間でゆれ動きながら、名門意識、家系の誇りという形に固まって行ったことだけは、疑いの余地がない。玄蕃頭の孫娘としての誇りは、有栖川家における生活と訓練によって、さらに裏打ちされ、いわば二重の封印を受けたので

4) John Nathan 『MISHIMA a biography』(Charles E. Tuttle Company, 1974), p.5 日本語は訳引用者。

ある。⁵⁾

このような佐伯の説はネーサンの推測を根拠にして成り立つものであるが、三島の自伝といえる『仮面の告白』(1949)に記されている「古い家柄の出の祖母は、祖父を憎しみ蔑んでいた。彼女は狷介不屈な、或る狂おしい詩的な魂だった」⁶⁾という個所と何等違和感を感じさせないのである。また、三島の母倭文重の証言⁷⁾も三島の話と一致している。

一方、三島の祖父平岡定太郎は文久三年、農業を営む平岡太吉の二男として兵庫県横山村に生れた。平岡家の祖先は元祿時代までさかのぼり、家系図によれば初代は「塩屋孫左衛門」になっている。三島の父平岡梓は平岡家が田舎の豪農「塩屋」として誇りを持ってたと語ったか⁸⁾、福島鏗郎はそのことについて次のように反論している。

『兵庫県人物列伝』(明治四十四年)『印南郡誌』(大正五年)などで見る限りではその記述はない。だとするならば「塩屋」は単なる屋号で、当時この地方の海浜は塩業の産地であったので近くの塩田で取れた「塩」を売っていた店も多くあった。あるいは単なる「塩」を売っていた店、とも推測される。⁹⁾

福島の主張は要するに、祖父の家系は単なる塩屋を営む庶民だったということである。更に福島の話によれば定太郎は、「神戸師範学校に学び、その後上京して二松学舎、早稲田専門学校、開城中学などを転じ、明治二十二年九月、帝国大学法科(現東大)に進んだ」、明治二十五年、二十八歳で卒業、内務省に入った。徳島県参事官、栃木県警務部長、内務省書記官、内務省参事官を経て、広島、宮崎、大阪府の書記官を歴任し、福島県知事へとエリートコースをいっきにかけ上がってきた」という。そうして四十四歳の若さで樺太庁長官に抜

5) 前掲書『評伝三島由紀夫』、pp.146~147

6) 新潮社版『三島由紀夫全集』第3巻収録、pp.165~166

7) 平岡梓『伴・三島由紀夫(没後)』(文芸春秋、1974)中の「<両親対談>三島由紀夫は誰のものか」pp.207~245

8) 平岡梓『伴・三島由紀夫』(文芸春秋、1972) p.40

9) 福島鏗郎『資料三島由紀夫』(新人物往來社、1975) p.77

擢された。

平民出身とはいえ、祖父定太郎の立身出世ぶりはりっぱなものであるが、にもかかわらず、自己顕示欲の強い三島にとって、自分の血筋の半分が平民だということが一生を通じて最大のコンプレックスであったのは疑いの余地がない。

三島が祖父に対して冷淡であった原因は祖母からの影響による点も多いに違いないが、「花ざかりの森」の場合、祖父ばかりでなく、弟の存在も完全に無視されており、父に関してもその無気力な後ろ姿が次のように描写されている。

母は父に勝った。

父は(彼は種々の植物の品種改良やたぐいまれな生物の飼育に生涯をさげ、さまざまな閑人の協会を組織していた)母に不満も怒りもかんじなかった。かれは負けたからだ。

(一行空ける)

秋のひと日、わたしはこんな父の姿をみたことがある。父は数人の園丁をしたがえ、黄ばんだ、はなだ色の鼠のなかに、じっと空をあおいで立っていた。父の姿は、それはひよわで貧弱でさえあったが、豊醇な酒のような秋の日光のしたで、年旧りた、飛鳥時代の仏像かなにかのように望まれた。その時、紫の幔幕のようにうつくしい秋空いっぱい、わたしはわたしの家のおどかな紋章をちらと見たのである。
(「その一」、全集1巻、p.144)

そして作品の後半へゆくと、《珍しいことにわたしは武家と公家の祖先をもっている》と、祖母方の家系に関わる話だけを持ち出している。もし上記引用の描写が実際に三島の眼に映った父の実像ならば、家系とは別に、三島は子供の時から気概がなく無気力な父の姿にかなりの失望感を抱いていたに違いない。かつて講談社編集部に勤めながら三島の作品を幾つも編集したばかりでなく、『午後の曳航』(1963)の取材旅行の時も三島と同行した川島勝は、三島の顔貌や声などが両親の特徴をよく受け継いでいると言い、「頭の格好は父親似で顔や声は母親そっくりと口をすべらせたら、不愉快そうな顔をされたが、例の父親に似た頭の方が気に入らなかつたらしい」¹⁰⁾と回想した。

10) 川島勝 『三島由紀夫』(文芸春秋、1996) p.82

3. 祖母の影響

大正から昭和に改元される前の年に生まれて四十五歳の時に自ら生涯を閉じた三島は純粹な昭和っ子と言えるが、その三島が生まれたのは祖母が四十九歳のときである。生れて間もなくから十三歳になるまで祖母と同じ部屋で過ごした三島にとって、祖母がその性格形成に決定的な影響を及ぼしたことは言うまでもない。例えば祖母の弟大屋敦は次のようなことを言っている。

きょうだいの中で最もジャーナリスチックに興味のあるのは姉に関することであろう。ただ一人の姉は、昔の文学少女であった。鏡花は非常に愛読していた。私など、鏡花を読んでもその世界が荒唐無稽についてゆけないのだが、文学少女だった姉はそれをたいへんおもしろいと感じるらしい。(中略)この姉の孫に平岡公威というのがいる。(中略)ペンネームが三島由紀夫なのである。本人は不足かもしれぬが、天与の文才は私の姉からの隔世遺伝かもしれない。¹¹⁾

三島本人が認めているとおり、母から文学的な影響を多く受けているが、上記引用を見ると祖母からの影響も無視できないのである。三島自身、エッセイ「ラディゲに憑かれて――私の読書遍歴」(1956)の中で子供の時を回想しながら「祖母の病床のそばには、大てい鏡花の初版本があったので、そういうものもわからぬながらのぞいた」と語っている。更に「日本の古典と私」(1968)にも「祖母が泉鏡花ファンで小説好き」だったという記述が見られる。祖母を通して鏡花の影響が三島の作品に滲透したことは、例えば「私の永遠の女性」(1956)には「中学の初学年のころであったと思うが、鏡花に一時傾倒して、鏡花ばりの『紫陽花』という小品を書いたことがある」という話が見られ、「紫陽花の母」(1967)でも、同じようなものであるが、「私はその幼年期の記憶を、中学時代に『紫陽花』という泉鏡花ばりの作文を書いて、先生に叱られたことがある」と回想している。『禁色』(1953)にも老作家椋俊輔の文学と関連して、「少年期に彼が影響を蒙った作家は泉鏡花であったが、明治三十三年に書かれた、『高野聖』は、その数年間、

11) 越次俱子『三島由紀夫・文学の軌跡』(広論社、1983) p.108からの再引用。

彼にとって理想の芸術作品であった」となっており、この辺は三島が、祖母の影響によって泉鏡花の作品に親しんだ少年期の体験を作中に活かしたものと見て差し支えないだろう。

三島が祖母からの影響を初めて、しかももっとも積極的な形で認めたのは『仮面の告白』である。そこには、神経疾患を病んでいた祖母と一緒に寝起きしながら過ごした幼少期の体験が次のように語られている。

祖母が私の病弱をいたわるために、また、私かわるい事をおぼえないようにとの顧慮から、近所の男の子たちと遊ぶことを禁じたので、私の遊び相手は女中や看護婦を除けば、祖母が近所の女の子のうちから私のために選んでくれた三人の女の子だけだった。一寸した騒音、戸のはげしい開け閉て、おもちゃの喇叭、角力、あらゆる際立った音や響きは、祖母の右膝の神経痛に障るので、私たちの遊びは女の子が普通にする以上に物静かなものでなければならなかった。私はむしろ、一人で本を読むことだの、積み木をすることだの、恣な空想に耽ることだの、絵を描くことだのの方を、はるかに愛した。そののち妹や弟が生れると、かれらは父の配慮で、(私のように祖母の手には委ねられず、)子供らしく自由に育てられていたが、私はかれらの自由や亂暴を、さして羨ましく思うでもなかった。(第一章、p.181)

これは、『仮面の告白』の冒頭部の、主人公が自分の異常性欲の秘密を告白しながらその根源を辿っているもっとも大切な個所で、その最大の原因が幼少期に祖母から受けた過保護であると告白している場面である。しかし幼少期の三島の目に映った祖母のイメージが単なる〈おばあさん〉に過ぎないものではなかったことは、作者本人をも含めて家族全員が実名で登場する短編「好色」(1948)からその一端を窺うことが出来る。

小柄な祖母は小さくまとまって、整った顔だちに、利発な子供に見られるような無邪気な叡智を宿していた。考え事をしているときは、真剣な可愛らしい物案じが、その額の皺に、丁度日没時の小さな愛らしい形をした茜いろの雲のように漂っているのが見えるような気がする。しかもその考え事の内容というのは、祖父の莫大な借金やその当てもない返済や近くあるべき差押というようないちばん深刻で怖ろしい考え事であったのである。(全集2巻、p.525)

この描写はどことなく谷崎潤一郎の『春琴抄』における春琴を思わせるが、この他にも《祖母の可愛らしさは無類であった》という記述も見られ、祖母に対して三島は、その家系ばかりではなく、人柄にもかなりの愛着を持っていたのである。それと同時に、祖父に対する冷淡さが単なる平民出身という身分にばかり起因するものではないのが分かる。母倭文重は父梓との対談の中で祖母について触れながら、《孫への溺愛が唯一の生き甲斐だった》、《孫の公威さんをおもちゃにした》¹²⁾と語っている。またエッセイ「暴流のごとく」では、神経疾患を患う祖母と一緒に暮していた当時の三島を次のように回想している。

この環境では普通の人間として育つ筈がない。粘土をこねる様に、刻々にゆがめられて行くに違いない。この恐ろしさをじっと見てはられない。

ところが子供は不思議なことになんと明るい性質なのであろう。あれ程酷な目に遇い乍ら、反抗するどころか素直に命令に従って、なお、どうしてにこにこしてられるのかしら。人間の子として出来るわざではない。神の化身ではないかと、本気で思ってしまう。力のない母親は只おどおど、はらはらするばかりで、何もして上げられない。すまないと思う。いつかあなたが大人になった時、きっと、わかってくれるでしょう。¹³⁾

親の立場から見ると、異常な環境で育てられている息子が大変心配だが、その心配とは裏腹に、『仮面の告白』にも見られるごとく、三島本人は当時の生活に不満はなく、祖母に対しても大変な愛着を持っていたのである。ある意味では、幼児期の特殊な体験が三島にとっては大きな自慢であり、しかも後日、作家として幸したと言えるのである。

4. 鐺木夫人

三島は祖父の家系から取材して作品を書いたことは殆んどないが、伝聞した祖母方の逸話はしばしば自作の中に活かしている。例えば「好色」は祖母方の人び

12) 前掲書『倅・三島由紀夫(没後)』p.217

13) 平岡倭文重「暴流のごとく」『新潮』(1976年12月号) p.102

とを実名のまま登場させた短編で、祖母の伯父に当る松平頼安が主人公になっており、作中には《作者はこの小説でいかに些細なアネクドットといえども公威¹⁴⁾が伝聞したこと以外には一切想像にたよらぬことにしている》という但し書きも見られる。頼安に関しては母倭文重の証言¹⁵⁾があるが、作中人物と殆ど一致している。

更に『愛の渴き』(1950)で園丁三郎を片思いした末に殺してしまうヒロイン悦子は、《素封家の、戦国時代の名将の血を引く旧家》の出身である祖母像と重なっている。¹⁶⁾

この他にも祖母を直接モデルにした作品としては「偉大な姉妹」(1951)がある。「あとがき」で三島は《私の祖母は小柄な女性で、女主人公のような偉大な体躯は持ち合わせていなかったが、この二人の女主人公の古風な言葉遣いや、古い礼儀作法の中に、私は亡き祖母の思い出を書き込んだ》と述べている。

三島が華族学校である学習院に入ったのも祖母の意見に従ったものであり、真に三島の一生を決定づけるほどの影響力を揮ったのは父でも母でもなく祖母だったのである。この祖母が、はたして三島本人の目にはどのように映っていたのか。『仮面の告白』を見る限り、《狷介不屈な、或る狂おしい詩的な魂》、《痲疾の脳神経痛》、《無益な明晰さ》、《狂燥の発作》などの表現から、ヒステリックな印象しか受けない。『愛の渴き』の場合、《狂燥のディテールは、フロイトの『ヒステリイ研究』に負うところが大きであった》¹⁷⁾と作者は断っているが、多分三島が幼少期に経験した祖母の発作が多く活かされているのであろう。《エウリピデースの戯曲『メーディア』の忠実な翻案》¹⁸⁾だという「獅子」(1948)で子殺しを演ずる繁子も悦子と多くの共通点を持っている。三島自身『愛の渴き』の「あとがき」で『獅子』について言及しながら、両方のヒロインの類縁性を認めている。

14) 《公威》は三島の本名である。

15) 《そういえばあの人に「怪物」という小説があるの。どうも東照宮宮司の大おじさまをモデルにしたらしいです》、前掲書『伴・三島由紀夫(没後)』、p.220

16) 『愛の渴き』における祖母像に関する詳しいことは拙論《『牝犬』論—三島由紀夫の「未亡人小説」考(二)—》(『日本文化研究』第3号、筑波大学大学院博士課程日本文化研究学際カリキュラム、1992、pp.95~98)を参照されたい。

17) 「あとがき」『三島由紀夫作品集2』(新潮社、1953)、全集26巻収録、p.259

18) 「あとがき」『三島由紀夫作品集4』(新潮社、1953)、全集26巻収録、p.264

三島の作品に登場する年上女たちを大ざっぱに二分すると、祖母タイプと母親タイプに分けることが出来る。前者には気性の烈しい未亡人が、後者の場合は優雅で繊細な心を持つ人妻が多い。その典型としては、前者には『愛の渴き』の悦子、後者には『沈める滝』の顕子をあげることが出来る。しかし、この二つのタイプのヒロインが同時に登場する作品は殆どない。多分三島は、幼少年期の体験を通して、この両者が決して相容れない存在であることを痛感したに違いない。『禁色』(1953)はその意味で、唯一の例外的な作品に当たる。ここでは家族全員が性的人間として改造された上で登場しており、従って祖母と母親も初めて顔を合わせるようになるが、それは鎬木夫人と穂高恭子である。

老作家・松俊輔は鎬木夫人のことを美青年・南悠一に、《あの女は気に入った男と見ると、一週間のうちに物にしてしまうという噂の主だ》、《あの女の悪癖は、浮気をするということなのか、あんな亭主にいつまでもくっついていくことなのか、そのどっちが彼女の悪癖だか第三者には見分けがつかない》と説明する。彼女は俊輔が立てた復讐計画の第一目標であり、年齢は恭子より十歳ぐらい上だから、四十五前後になる。美青年の南悠一を初めて見た時の彼女の感想が《彼女が悠一の中に直感したのは、母親と息子間の愛をはばむような或る禁忌だった》となっているのは、二人の関係を用いて母子相姦に近似した近親相姦を象徴させようとする作者の意図の表明であろう。もちろん作者の三島にとってそれは祖母と孫の関係を象徴するのである。

『禁色』第一部の連載が終った翌月、三島は「改訂広告」を出して、服毒自殺した鎬木夫人を、行方不明になったことに変更した。この辺の事情について三島は「あとがき」で《この人物には書くにつれて愛着が増して来ており、殺すには惜しい女だったから》と説明している。また、作品が《何度もプランから逸脱して作者を閉口させた》¹⁹⁾とも言った。従って、鎬木夫人に関する描写は一貫性を欠くことになり、第二部にみられる彼女の姿は、《気に入った男を見ると、一週間のうちに物にしてしまうという噂の主》という俊輔の説明とは程遠く、真面目で面倒見のよい中年のおばさんに変貌している。にもかかわらず彼女が悠一に

19) 「あとがき」『三島由紀夫作品集3』(新潮社、1954)、全集26巻収録、p.264

とって母親的な存在ではなく、祖母的な存在であるのは次のような理由からである。

まず、彼女が悠一と最初に会い、銀座の或る酒場へ悠一を連れて行った時のことが次のように書かれている。

酒場で、大ぜいの女たちの間に埋もれている彼を、彼女はわざと遠くのほうからじっと見るのだった。こういう場所に馴れない悠一は、あまつさえ着馴れない背広を着ているので、上着の袖口の中へ隠れてしまいがちなワイシャツの白い袖口を、ときどき快活に引っ張りだす。それを見ているのが、鍋木夫人には大そうたのしかった。(第五章、全集五巻、p.94)

この場面は宛ら『仮面の告白』の、「私の遊び相手は(中略)、祖母が近所の女の子のうちから私のために選んでくれた三人の女の子だけだった」という話と酷似している。いわば、子供の時から遊び相手として女の子ばかり与えていた祖母が、成人した孫に再び女たちを与えて楽しんでいる場面である。ここには、自分の性観念が祖母によって歪められたと思っている三島の深層意識が反映されていると言えるのである。

二つ目は、「改訂広告」を出す前の、第一部の最後のところについてである。夫と悠一の同性愛を目撃した鍋木夫人は《モルヒネを含有するパピナール》を呑んで自殺するが、ここには明らかに男の同性愛による女性的原理の駆逐、または、かつて祖母によって禁じられた男たちを性的な相手にすることで、それまでの自分の性観念を支配してきた祖母に対抗しようとする作者の意図が現われている。

三つ目は、鍋木夫人と穂高恭子が初めて対面する場面である。この悠一を間において二人が演ずる年上女同士の葛藤には、作者の幼少期の原体験、つまり幼い自分を間に挟んでの祖母と母親との葛藤が活かされているのである。三島は「僕に託した”娘時代の夢”」で次のようなことを語っている。

僕は小さいとき祖母にそだてられたが、この祖母と母の僕をめぐっての愛情のもつれがあった。それで複雑な女性の心理にたいする興味というようなものを僕は子ども

のときからすでに持っていた。(「全集」補1、p.189)

つまり、このような幼少期の経験が『禁色』にはそのまま、鎬木夫人と穂高恭子との対立として描かれているのである。二人が初めて対面する場面で、《鎬木夫人ほどの人が、十歳も若い女の軽蔑の目くばせに気づかなかったのは、その場の嫉妬が彼女の矜りを失わせていたからである》となっているのは、二人の年齢差を用いて、鎬木夫人には祖母を、穂高恭子には母を象徴させようとする作者の意図の現われであろう。

以上の三点によって、当初のプランでは、鎬木夫人が祖母的な存在として設定されていたことが或る程度証明されたと思うが、作品が何度も当初の計画から逸脱して作者を閉口させたというからには、後半に入って次第に彼女が母親的な存在に変貌して行ったとしても不思議はない。

そもそも作者は俊輔と悠一の提携による女性への復讐を大きなテーマにする積もりであった。それが当時、男の同性愛を前面に掲げた三島文学としては語るべきテーマだったのは言うまでもない。鎬木夫人の自殺という構想もそこから生れたのである。しかし、「改訂広告」を出して彼女を甦らせた時点で作品全体の構想は一変し、テーマ自体も女性への復讐から男性への復讐になってしまう。

後日、三島は中村光夫との対談で《ぼくは自分の小説はソラリズムとか、太陽崇拜というのが主人公の行動を決定する、太陽崇拜は母であり天照大神である。そこへ向かっていつも最後に飛んでいくのですが、したがって、それを唆すのはいつも母的なものなんです》といい、更に次のようなことを語った。

日本人の行動性の裏にはおふくろがべったりくっついている、それを発見するので。ぼくの小説の場合には、第一巻では非おふくろ的な女性がヒロインになって、彼女は主人公と恋愛して、ちょっとおふくろ的な擬装をするけれども、完全な女になっちゃう。第二巻ではおふくろで通しちゃっている。ずいぶんいろいろな文献を読んで、そういうすじを考え出した。いくら女を締め出してもだめです。最終的におふくろが出てくる。²⁰⁾

20) 中村光夫／三島由紀夫『対談・人間と文学』(講談社、1968)、p.53。但し、対談が行われたのは1967年7月10日。

これはかなり鎬木夫人の場合と一致する話である。三島は『仮面の告白』で自己の心理分析を行ない、その結果として祖母の影響の恐ろしさを自覚し、その影響からの脱皮を变身もしくは成長の第一目標に決めたのである。鎬木夫人が悠一と知り合った後、《いたるところへ追いかけて来る悠一の傲岸な侮蔑の視線》から《ひざまづけ！はやくはくの前にひざまづけ！》とを感じる場面には、祖母からの影響に抵抗し、それを克服しようとする作者の心理が露骨に投影されている。

ところが、三島が「改訂広告」を出して当初の計画を変更したのは、鎬木夫人への愛着が増して来たせいばかりではない。もっと大事な原因は、誇張された同性愛と、コンプレックスを裏返したようなナルシズムを以て男性的な世界を確立しようとした構想自体が無理だったと自覚したところにあるのである。しかも、悠一が女性には無関心だとは言え、女性に代って他の年上男たちに弄ばれていては真の男らしさは体现出来ないのである。従って、テーマはひとまず男性への復讐、もしくは男たちとの決別に変わらざるを得なかった。

また、鎬木夫人を生かすことによって彼女への復讐を断念した以上、残りの二人、母と妹を象徴する恭子と康子への復讐計画も当然色褪せてしまう。それに母と妹は三島にとってそれほど手ごわい存在でもなかったし、そもそも復讐する必然性もなかったのである。

『禁色』における、鎬木夫人への復讐の放棄、それが齎した予期せぬ波紋は、結局祖母という存在が三島の内面世界においてどれほど大きな影響力を及ぼして来たかを優に物語っている。

5. 男だけの家庭

『禁色』の後半部における破綻からわずか一年余り後、三島はかなり強引な方法で作品世界から女性の影響を排除して純粋な男性像を確立しようと試み、『沈める滝』(1955)を《中央公論》に連載した。家庭内の専制者である祖母によって、近所の女の子だけを相手に、《女の子が普通にする以上に物静かな》遊びしか出来なかった三島自身の幼少年期の思い出を裏返しにしたのが、『沈める滝』の昇の

幼少年期にあたる。三島は『仮面の告白』における祖母に代わって『沈める滝』では祖父を登場させたのである。作品の冒頭は次のように始まる。

城所昇は、小説の主人公たるには不利な人物で、人の共感や同情をこれほど受けにくい男はめずらしい。世間の判断で言うと、彼は「恵まれすぎていた」のである。

父は早く死んだので、彼は祖父の寵児であった。その祖父も三年まえに亡くなったが、祖父の庇護は、死後もなお、愛する孫の生活を厚く包んでいた。

祖父の城所九造の名は、電力界では誰知らぬ者がなかった。豪宕で、復讐心に富み、道楽には目がなく、おそるべき精力の持主で、夏のさかりにもネクタイと上衣をつけ、終始一貫、「民衆の敵」であった。(第一章、全集九巻、p.329)

この冒頭文は一応、城所家における男たちを紹介したもので、特に昇が父ではなく徹底的に祖父からの庇護を受けたところに注目する必要がある。これには、三島としては、多分『盗賊』の父藤村子爵よりは『禁色』の桧俊輔がもっと役に立つ人物だったという経験から、父親よりも祖父を前面に出したのではないかと思われる。家柄や社会的な権威を象徴する人物としてばかりでなく、父親という存在や父子間の絆を嫌った三島にとって、偉い父親をもつ主人公のよりは、偉い祖父をもった主人公の方が好ましかったのである。従って、生前の祖父が昇に絶大な影響力を及ぼしたのに比べて、父親はまったく無気力な存在だった。

祖父は竣工式の記念品の発電機の模型や、鉄の組立玩具や、ダムの調査の折にもちかえた河底の石などばかりを孫に与えた。玩具は要するに、石と鉄ばかりであった。空想力の乏しい、しっかりした子供で、小学校の先生は、昇が数学がよくできるのにおどろいたが、情操のまるきり欠けていることにもおどろいた。塗絵をさせてみると、馬でも兎でも、おなじ灰いろに塗りつぶしてしまった。(中略)

父は昇が十歳のときに死んだが、この病弱な怠け者は、九造の孫の教育に不服をとえながら、反対もようせずにいた。その上、彼は別に息子にどうこう言うほどの関心もなかった。美術学校へ入りたいという望みを父親に阻止されて、日本銀行へ入れられて、週末毎に写生旅行へ出かけるようなこの男は、息子の描く絵を見て、ぞっとしたのである。(第一章、p.331)

祖父に比べて父親は昇に何の影響も与えなかったし、家族の一員としても影の薄い存在であった。但し、《父は昇が十歳のときに死んだ》ことにして置いてもよさそうなものを、わざわざ《この病弱な怠け者は、九造の孫の教育に不服をとくなえながら、反対もようせずにいた。その上、彼は別に息子にどうこう言うほどの関心もなかった》という風に、非難めいた言葉を付け足したのは、父に対する三島の根強い反感からかも知れない。

祖父の影響力や父親の軟弱さを語った後、城所家の女たちについては次のようにまとめて紹介している。

祖母は発狂して、死ぬまで病院に入っていた。九造には二三の妾がいたが、決して出入りをさせなかった。そこで母親が産褥熱で死んでこのかた、ひどく男性的な乳母を除いては、昇は女気のない環境で育った。彼は男の子の教育にしばしば歪みを与える、秘められた望みや復讐心をかくした母性の柔らかな手を知らずに育ったのである。(第一章、p.331)

『仮面の告白』ではあれほど強烈な、《狷介不屈な、或る狂おしい詩的な魂》だった祖母は、『沈める滝』では《発狂して、死ぬまで病院に入っていた》というから、多分昇は祖母の顔すらも知らずに育ったのであろう。母は産褥熱で死に、乳母すらも《ひどく男性的》だったというのは、多少は誇張し過ぎの気もするが、それほど祖母の影響力を克服しようとする三島の願望や決意は大きかったのである。その結果として、昇は次のような男に成長したのである。

昇の姿かたちは、まことに見事に成長した。ふつうの少年とはちがって、女が何故かしら彼に感動を与えるということを知るより先に、ぼんやり立っているだけで、彼が何故かしら女に感動を与えるということを知った。或る感覚世界の発見は、昇にとっては、まるきり観念的な形をとらなかった。(第一章、pp.331~2)

三島の作品において、完璧な肉体を持つ美青年の原型といえば『禁色』の南悠一であるが、《愕くべく美しい青年》で、《ギリシャ古典期の彫像よりも、むしろペロポネソス派青銅彫像作家の製作にかかるアポロンのように》だと言うのは、

両性、即ち男から見ても女から見ても完璧な青年を描こうとした作者の意図が、却って世間の酷評を受ける原因になったのである。そのために、昇に関する具体的な描写は避けて、周囲の反応を用いて読者の頭にそのイメージを浮かばせる方法を取ったのである。特にここでは、あれほど完璧に女気のない環境で育った昇が、今度は、如何に女にもてるかという、逆に徹底して女性の目を意識した主人公像に仕上げたのである。

もちろん三島としては自分のもっとも理想とする男性像を昇に投影させたのであろうが、《祖父の遺産で相当な証券収入のあるこの美貌で健康な青年》は、家族に絆に縛られることなく、経済的にも《恵まれすぎていた》である。

昇は実際、二十七歳がもてるだけのものを全部もっていた。若さ。金。秀抜な頭脳。強靱な体躯。加うるに系累のない完全な自由。一方にはまた、男の必需品である仕事。どこから見ても人ぎきのわるくない職業。退屈に陥らせぬ程度に自由を抑制するこれら市民的な調味料。……(第一章、p.338)

《殆んど鼻歌まじりと言いたいほどの気楽な速度で、傾斜の上を迂りだした》(『仮面の告白』)という、没落した一家の長男として生まれ、大人たちの期待を一身に背負いつつ、祖母と母との絶え間ない諍いを目の前にしながら育った三島は、肉親の粘っこい絆を毛嫌いし、《係累のない完全な自由》というを昇に与えたのである。以後、三島の作品では、この手の主人公に一連の系列が出来て、次作『金閣寺』(1956)の溝口も、『鏡子の家』(1959)に登場する四人の青年たちも殆ど家庭的な束縛からは自由な身分であり、後年の『午後の曳航』や『命売ります』でも殆ど係累のない自由な身分の青年たちが主人公として登場する。つまり、三島が幼少期に経験した家庭や家族とは一種の母系社会であり、そこにおける女性の影響から自由になれない限り、真の男らしさは得られないものと考えたのである。

6. 鬼子母神

若いときの三島は、自分の文学から女性的な軟弱さと繊細さを切り捨てようとした。そして、自分の文学の独創性を〈男性的なもの〉から求めようとした。ところが皮肉にも三島由紀夫の作家歴は、ある意味では、祖母からの影響からはじまり、その影響を克服するための苦悩によって貫かれたと言っても過言ではない。それほど三島が祖母から受けた影響は大きかったのである。勿論、それは三島が祖母を嫌ったからではなく、むしろ早くからその存在の重大さを認めたからである。

三島の習作期や初期、つまり十代から二十代にかけて書かれた、母系社会的(女性的な文化)²¹⁾な作品世界の中では、気性の激しい鬼子母神型のヒロインが多く登場するのに対し、中期、つまり三十代に入ってから慈母型のヒロインを多く登場させている。谷崎文学のよき理解者であった三島は「谷崎潤一郎について」(1966)の中で、エロスと母性に触れながら、谷崎の作品に登場するヒロインたちを二種類に分けて次のように説明している。

鬼子母神は、子をとらえて喰う罪業を拭われて、大慈母となるのであるが、氏のエロスの本質を探ると、この鬼子母神的なものにめぐり当る。ふつう鬼子母神の像は、その怖ろしい伝説の痕跡もとどめぬ豊満な肉体美の坐像であって、左手に一児を抱き、五人の児がこれを囲んでいる。女性とは、氏にとって、このようなダブル・イメージを持ち、慈母としての女性の崇高な一面は、亡き母に投影され、一方、鬼子母神的な一面は、ナオミズムの名で有名な「痴人の愛」の女主人公に代表されるのであるが、後者ですら、その放埒なエゴイズムと肉体美が、何か崇高なものとして崇拜の対象になっている。そして、女性のこの二つの像が、最晩年の「瘋癲老人日記」の主人公の極楽往生の幻想のうちに、見事に統一されていると考えられる。(全集32巻収録、p.449)

三島は、谷崎文学に登場する女性たちを鬼子母神型²²⁾と慈母型に分けて説明

21) 神西清「ナルシシズムの運命」『三島由紀夫・批評と研究』(芳賀書店、1974) p.20

22) 東京都豊島区雑司が谷の北西部に〈雑司が谷鬼子母神〉ともよばれる法明寺の鬼子母神堂がある。

したが、ある意味でこれは三島自身の文学を語った文章として見ることもできるほど、三島文学のヒロインたちと一致している。つまり、三島の作品に登場するヒロインたちを大別すると、気性が激しくヒステリックな鬼子母神型のヒロインと、優雅で優しく品の良い慈母型、の二系列に分けることが出来る。言うまでもなく、前者は祖母、後者は母がその原型である。

生まれてまもなくから祖母の病室で一緒に寝起きしながら育ったことは三島文学のもっとも大事な原体験であり、祖母の意思に従って学習院初等科に就学したことや、名門の血を引く祖母方の家系、祖母が泉鏡花を愛読者だったこと、などの理由だけでも、三島が祖母からうけた影響の大きさを推し量ることができる。しかし、二十代に入った三島が自己改造を試みるようになり、自分の中の男性性に目覚め、より強い自分を求めた時、鬼子母神型のヒロインもしくはその原型である祖母のイメージは徐々に作中から排除されざるを得なかったのである。

以上、「三島文学における家族像」という研究テーマの一環として、祖母と関連した部分に焦点を合わせて考察して自分の文学から祖母の影響を放逐しようと努めた三島の試みが実を結んだか否かとは別に、それを試みる過程における苦悩が三島文学の一つの特徴であり、その申し子として <牡の文学>²³⁾が誕生したことに大きな意義を置くべきであろう。

참고 문헌

- 安藤武(1998)『三島由紀夫の生涯』, 夏目書房, pp.7~11
 川島勝(1996)『三島由紀夫』, 文芸春秋, p.82
 越次俱子(1983)『三島由紀夫・文学の軌跡』, 広論社, p.108
 佐伯彰一(1978)『評伝三島由紀夫』, 新潮社, pp.142~147
 白川正芳編(1974)『批評と研究・三島由紀夫』, 芳賀書店
 John Nathan(1974)『MISHIMA a biography』 Charles E. Tuttle Company, p.5
 中村光夫/三島由紀夫(1968)『対談・人間と文学』, 講談社, p.53
 平岡梓(1972)『伴・三島由紀夫』, 文芸春秋, p.40

23) 前掲書「ナルシシズムの運命」、p.23

_____(1974) 『伴・三島由紀夫(没後)』, 文芸春秋, pp.207~245

平岡倭文重(1976) 「暴流のごとく」 『新潮』, p.102

福島鑄郎(1975) 『資料・三島由紀夫』, 新人物往来社, p.77

許昊(1992) 「『牝犬』論—三島由紀夫の「未亡人小説」考(二)—」 『日本文化研究』 第3号,
筑波大学大学院博士課程日本文化研究学際カリキュラム, pp.95~98

❖ 투고일 : 2006. 6. 30

❖ 심사일 : 2006. 7. 31

❖ 심사완료일 : 2006. 8. 11